

『共産党宣言』と現代

- 一 『宣言』発表の背景
- 二 『宣言』の内容
 - (一) ブルジョアとプロレタリア
 - (二) プロレタリアと共産主義者
 - (三) 社会主義的および共産主義的文献
 - (1) 反動的社会主义
 - a 封建的社会主义
 - b 小ブルジョア社会主义
 - c ドイツ社会主义または「真正」社会主义
 - (2) 保守的社会主义またはブルジョア社会主义
 - (3) 批判的ユーロピア的社会主义および共産主義
 - (四) 種々の野党にたいする共産主義者の立場
- 三 現時代における社会主義の発展

『共産党宣言』と現代

井 上 周 八

一 『宣言』発表の背景

マルクス生誕から今日まで一六九年、『共産党宣言』が公表されてから一三九九年が経過した。これは歴史的時間としては長いとはいえない。しかしマルクス主義の出現は世界史に巨大な影響を与えた。ソ連、中華人民共和国、東欧社会主義諸国、朝鮮民主主義人民共和国、キューバ共和国、その他の社会主義国などが生まれ、世界は資本主義と社会主義の二大勢力圏に分裂している。キリスト教が出現して二千年近くもたつが、マルクス主義の影響に比べてどうであろうか。社会制度としてのキリスト教国は存在しない。なぜマルクス主義はこのような巨大な影響力を發揮しつつあるのだろうか。

まずマルクスとエンゲルスが一八四七年一月から一八四八年一月に執筆し、二月にロンドンで印刷し、独立の小冊子として発行した『共産党宣言』がのもつ意義を考察するに先立って、『宣言』が出される当時の歴史的背景をみておこう。

『宣言』はその冒頭で次のように述べている。

「一つの妖怪がヨーロッパをさまよっている。共産主義の妖怪が。旧ヨーロッパのあらゆる権力が、この妖怪を退治するために神聖な同盟を結んでいる。教皇もツァーリも、メッテルニヒもギゾーも、フランスの急進派もドイツの警官も」

そしてこの事実から二つの結論がでてくるとして宣言は以下の二点を指樟する。

① 共産主義は、すでにヨーロッパのあらゆる権力から一つの力として認められているということ。

② 共産主義がその考え方、その目的、その意向を全世界に公表し、共産主義の妖怪ばなしに党みずからの宣言を対置すべき時がきているということ。

まず『宣言』が発表された当時の世界の状況について簡単に述べておこう。

マルクスとエンゲルスが彼らの「新世界観」を確立し始めた十九世紀半ばは、欧米各国が近代化の道を歩み、大きな歴史の転換期を迎えていた時期であった。

近代ヨーロッパにおける進歩的思想は、イギリス革命（一六四二～六〇年のピューリタン革命と一六八八年の名誉革命を総称）と一七八九年のフランス革命という二つの社会革命、および一八世紀から一九世紀にかけてのイギリスを先頭とする産業革命によって多大な影響をうけた。

イギリスやフランスの革命は、人間が社会制度を目的意識的に変革できるということ、および産業革命は将来における社会の生産力と人類の創造力の巨大な発展の可能性を事実として人類に示した重要な出来事であり、このことによって人間は自然と社会を積極的に改造しようとする志向と能力をいちだんと強めたのである。

当時の先進国イギリスはすでに産業革命が完成し、世界の市場を制覇する勢いにあったが、国内では資本主義の発達とともに労働運動が起り、社会主義思想を生み出していた。

資本制生産様式をいち早く成立させつつあったイギリスは、産業の発展につれ、労資の対立とともにチャーチスト運動がおこり、一〇時間労働法が一八四七年に制定された。

イギリスに次いでフランスも産業革命が順調に進展した。しかし、ここでも同時に新しく興った労働者階級の運動は活発となった。

一七八九年の革命以降、自由民権運動はフランスにおいて再び爆発し、保守専制のブルボン王朝を打倒した。一八三〇年七月革命である。この変革のうねりは直ちにベルギー、ドイツ、イタリア、ポーランドにも押し寄せた。フランスでは労働運動は引き続き活発となり、一八四八年の二月革命など、短期間ではあったが社会主義者の加わった政府が成立したのをはじめ、政府に反対する勢力は一定の力として存在するようになっていた。

ドイツはまだ国の統一を成し遂げるには至っていなかった。しかしヨーロッパを席捲した自由主義の波からは逃れられず、遅ればせながら産業革命が進行し、統一への道を歩む途上にあった。社会主義者たちの政治運動はここでも例外ではなく、年々激しさを増していった。

他方、広大な新興国となったアメリカ合衆国においては、奴隸制をめぐる対立が深刻化し、国を二つに割る南北戦争が始まろうとしていた。この頃日本では三百年に近い鎖国体制が衰退の兆しをみせ、国の内外からの激しい変革の要請に揺れ動く時代を迎えていた。

マルクスが生まれた一八一八年はナポレオン・ボナパルトが没落した三年後であった。一八一五年、オーストリアの保守的な首相メッテルニヒはウィーン会議を召集してウィーンと条約を結んだ。その目的はフランス革命によって燃え上った自由・平等・友愛の民権思想と革命思想にもとづく運動を、列国が同盟して鎮圧し、もとの保守専制を回復しようとするところにあった。ここに各国が兄弟のように相助けあおうとする「神聖同盟」が、自由主義的なイギリスを除いて結ばれた。メッテルニヒはこの同盟を利用して専制政治をおこない、ドイツ、イタリア、スペインなどの革命運動を武力で弾圧し、彼の反革命保守主義は、一時、ヨーロッパを風靡したのである。

マルクスは一八四一年ベルリン大学を二三歳で卒業し、ベルリンへ、そしてボンへと移ったが、翌年ケルンに移り

『ライン新聞』の編集主任となった。しかし一八四三年これを辞任し、イエニーと結婚してパリに移転し、四四年に『独仏年鑑』一、二号合併号を発行し、それに『ユダヤ人問題』および『ヘーゲル法哲学批判序説』などを発表し、また経済学の本格的研究を開始したが、その成果の一端が『経済学・哲学草稿』に示されている。

一八四五年にマルクスはパリをギーによって追放されベルギーのブリュッセルへ移住した。エンゲルスもまたバルメンからブリュッセルに移ってきたので、二人は初めて直接対面して話し合うことができ、共通の新世界観を確認しあうことができた。その後の生涯を通じて変らぬ同志となる二人は、約六週間イギリスに旅行し、チャーチスト運動にふれ、またロンドンの「義人同盟」とも連絡をとった。

マルクスとエンゲルスは二人の列達した共産主義理論を宣伝・普及するために「共産主義者通信委員会」を一八四六年二月、ブリュッセルに設立した。そして三月三〇日にその委員会が開かれた。委員は八人でそのなかにエンニー夫人の弟であるエドガー・フォン・ヴェストファーレンもいた。席上マルクスは委員の一人であるヴァイトリングの見解を批判した。彼の見解は、現実の市民社会の経済的分析がなく、ルンペンプロレタリアートによる暴力革命を主張し、政治闘争を否認するものであった。またマルクスは「真正社会主義(ドイツ社会主義)」、ドイツ社会主義の見解も批判した。この見解はフランスの社会主義・共産主義思想の文献を耽読したドイツの哲学者・思想家がその持つ実践的・革命的意味を重要視することなく、彼らの古い思弁哲学で社会主義を観念的に把握し、これこそ真の社会主義であると主張したものであり、彼らの見解はあらゆる階級闘争を否定し反動的役割をすら果たしたのである。これに反してマルクスは正しい社会・歴史の発展法則の理解に基づき、プロレタリアートの歴史的使命を明確にし、階級闘争の理論を主張した。通信委員会は全国各地の共産主義者たちに連絡をとった。

マルクスは『独仏年鑑』で「ドイツの状態に戦いを！」といったスローガンを掲げ、彼自身、封建的圧制者に対する闘争を注目し、支持した。一八四七年のイギリスの経済恐慌の波及によりドイツの革命的雰囲気も高まり、封建貴族とブルジョアジーの衝突も激化した。そしてこのような経済的・政治的情况下でプロレタリアートは何を為すべきかが明白に示される必要が切迫した。義人同盟の内部や共産主義者をはじめ労働者大衆のなかでも統一した意見は確立されていなかった。ブルジョアジーは労働者の敵なのか、それともプロレタリアートを擁護してはいるが、国王や貴族にたいしてはブルジョアを支持すべきか。またプロレタリアートは封建貴族とブルジョアジーとの対決で傍観者として漁夫の利を占めるべきか。こうした問題が提起されているなかでマルクスとエンゲルスはプロレタリアートの使命を明らかにし、党を創建する準備を行っていたのである。彼らは当面の革命はブルジョア民主主義革命であるとしてみていた。そしてこの革命に続いてプロレタリア革命へ移行すべきだとみていた。この二段階革命を遂行するためには革命的なプロレタリア党をつくらなければならない。すでに階級意識に目醒めたドイツの労働者を武装させ、綱領を与えて彼らの任務を明らかにし、ブルジョア民主主義革命に参加させなければならない。マルクスとエンゲルスは革命的労働者党を創立する準備に全力を捧げた。マルクスは一八四七年夏に予定されていた第一回の義人同盟大会の準備を助け、新しい規約を起草し、「民主主義的中央集権制」の組織原則を盛り込み、同盟を共産主義者同盟と名付けた。一八四七年六月、ロンドンでの第一回同盟大会について一月二九日第二回同盟大会が開かれ、労働者階級の最初の革命党である共産主義者同盟はここにその創立をみたのである。

エンゲルスはその死の数年前に、ゲルソン・トリールへの手紙で次のように書いている。

「決戦の日にプロレタリアートが勝利できる力をもつためには、特別な党を、他のすべてから分離し、それらに対立

して、自覚をもった階級政党をつくる必要がある——それをマルクスと私は一八四七年以来主張してきたのだ」
共産主義者同盟のメンバーは少なかった。それは五〇〇人ほどであったが、しかし革命的労働運動が展開するための
礎石となるものであった。

一八四七年一月下旬から二月上旬にかけて、ロンドンで開かれた共産主義者同盟の第二回大会で、マルクスと
エンゲルスは宣言の起草を依頼された。それは四八年の一月下旬にようやく完成しロンドンに送られ、二月の終り
に、みかけはぼっとしない二三ページの小さなパンフレット『共産党宣言』として出版された。マルクスは三〇歳に
なろうとしており、エンゲルスは二七歳をこしたばかりであった。

『宣言』の歴史的意義については余りにもよく知られている。それは人類の思想史上に残る比類のない古典的文献
である。何よりもそれは科学的共産主義の最初の綱領的文書であった。

マルクスとエンゲルスが一八四三年から四八年にかけて到達した新世界観とそれに基づく経済学、階級闘争、社会
主義についての科学的見解が『宣言』には体系的に、簡潔に述べられており、誤まった見解を明快に批判している。

『宣言』は「共産主義者同盟」の理論的実践的・綱領として執筆された。それは社会発展の法則を解明し、資本主
義の矛盾、資本制生産の過度的性格、社会主義・共産主義への移行の必然性、プロレタリアートの歴史的任務を解明
した。

現在、一部の学者たちは「マルクスが一時代を画する大思想家であることは、誰しも認めるであろう。しかし、マ
ルクス主義者の内部においてすら、彼の思想体系の理解をめぐって深刻な対立があり、統一的なマルクス理解がなざ
れるには程遠いのが現状である」と述べている。

とくに初期マルクスと後期マルクス、またマルスクとエンゲルスの所説が矛盾しているとする批判がなされる。

このような初期マルクスの研究において、後期マルクスの相異とか矛盾を主張し、まだ未完成なマルクスの思想を、その後の発展との関連で全体的に認識せず、絶対化することによって、真のマルクス主義とはこれであるとして、マルクス主義とはこれであるとして、マルクス主義そのものを歪曲し否定しようとするブルジョア・イデオロキを批判して『マルクス・エンゲルス全集』、第四〇巻の「序文」は次のように批判を加えている。

「たえず増大していくマルクスレーニン主義の影響にたいするたたかひのなかでブルジョア・イデオロキたちは、マルクス主義の成立史を客観的にあたえられた歴史的発展条件から切り離そうと試みている。その場合、彼らとはくに若いマルクスの若干の見解を彼の初期の著述の思想的連関から、またマルクスとエンゲルスの仕事全体の連関からもぎ離したり、あるいはこれらの連関を時代錯誤的にてっちあげる。彼らは革命的学問のこの両指導者の連関な精神のおよび政治的發展を否定し、若いマルクスを年配のマルクスに、若いエンゲルスを年配のエンゲルスに対置する。彼らはエンゲルスの仕事の価値をおとしめたり、マルクスとエンゲルスをたがいに対置しようとしたりする。そうすることによって、またその他の方法によって、彼らは初期諸著作の客観的意味と思想的新しさを、またマルクスとエンゲルスの学説の形成とその後の発展の全過程をも変造する。彼らは、労働者階級のはじめて出来上がりつつある革命的世界観のうちにある質的に新しいものの芽をみとめなかつたり、ぼやけさせたりする。彼らはまだ未完成なものを絶対化して、そこから「真の」マルクス主義なるものをでっちあげ、これをマルクスレーニン主義に対置する。

マルクスとエンゲルスの青年期著作を研究し、そして客観的な発展諸条件を土台とするマルクス主義の生成とその

全面的に展開された学説を調べることは、ブルジョア・イデオロクたちが社会主義的社会秩序とたたかい、資本主義的搾取関係を擁護するために変造されたマルクスを利用する目的で用いるそのような、またその他の似非学問的方法をやっつけるための理論的武器を提供する」

三〇歳のマルクスと二七歳のエンゲルスによって書かれた『共産党宣言』は、古くしてなお現代に生きる古典である。

以下、『宣言』の内容をみよう。

二 『宣言』の内容

『共産党宣言』の目次は次の通りである。

まえがき

(一) ブルジョアとプロレタリア

(二) プロレタリアと共産主義者社会主義

(三) および共産主義的文献

(1) 反動的社会主义

a 封建的社会主义

b 小ブルジョア社会主义

c ドイツ社会主义または「真正」社会主义

『共産党宣言』と現代

(2) 保守的社会主義

(3) 批判的・ユートピア的社会主義および共産主義

(四) 種々の野党にたいする共産主義者の立場

マルクスとエンゲルスは一八七二年ドイツ語版の『共産党宣言』の序文で次のように述べている。

「この二五年間に事情がどんなに大きく変化したにしてもこの『宣言』のなかに述べられている一般的な諸原則は、だいたいにおいて今日でも完全に正しい。「個々の点では、あちこちで改善の余地があるであろう。これらの原則を實際にどう適用するかということは、『宣言』そのものが述べているように、いつどこでも、当面する歴史的事情によって決まるであろう。だから第二章の終わりに提案している革命的諸方策には、けっして特別の重点をおいてはいけない。この個所は、今日書くとすれば、多くの点で表現を変えなければならぬであろう。この二五年間に大工業がなしとげた長足の進歩や、それにとりまう労働者階級の進展からみれば、また、最初は二月革命において、次には、このほうがはるかに重要であるが、プロレタリアートがはじめて二月月のあいだ政治権力をにぎったあのパリ・コミューンにおいて得られた実践的経験に照らしてみれば、この綱領は、今日ではとどころ時代おくれになっている。とりわけコミューンは、労働者階級は、できあいの国家機関をそのまま奪いとって、自分自身の目的のために動かすことはできない」(『フランスにおける内乱、国際労働者協会総評議会の呼びかけ』、ドイツ語版、一九ページ[邦訳、新書版選集、第四冊、二〇五ページ]を参照。そこではこの点がさらに展開されている)ということを証明した。さらに、社会主義的文献の批判は、一八四七年までしか及んでいないのだから、今日からみれば不完全なことはいうまでもない。同様に、さまざまな反政府諸党にたいする共産主義者の立場について述べていること(第四章)も、その骨子は今日でも

正しいとはいえ、政治情勢がまったく一変してしまい、そこにあげられている諸党の大部分が歴史的発展によってこの世から一掃されてしまったという理由だけからしても、実際上の細目では、今日では時代おくれになっている。けれども、『宣言』は歴史的な記録文書であって、もはやわれわれにはそれに変更をくわえる権利はないと考える。将来、版を改めるさいには、おそらく、一八四七年から今日までの開きを埋すめる序論をつけることになるであろう」

(「一八七二年ドイツ語版」序文、全集第四卷五九〇一ページ)

ここで述べられているように、『宣言』はその発表の二五年後には、執筆者によって「歴史的な記録文書」とされているのであり、それ故、現在の私たちにとってはまさにそうである。したがって、私たちは今日、『宣言』がなお私たちに与えている原則的教訓が何かを学びとるといふ態度で、この歴史的古典を読まなければならない。

(1) ブルジョアとプロレタリア

ブルジョアとは近代の資本家、すなわち社会的生産手段を所有し、賃金労働者を使用する人のことであり、プロレタリアとは生産手段を所有していないので、生きるために自己の労働力を売るほかにない、近代の労働者のことである。

マルクスはこの第一章を「これまでの社会の歴史は階級闘争の歴史である」という有名な一句で始めている。

この有名な一句について、ドイツ社会主義統一党中央委員会付層のマルクス・レーニン主義研究所の編集注記は次のように述べている。

「つまり、文書にしろ、された歴史全体。一八四七年には、社会の歴史、すなわち記録にのこる歴史の以前にあった社会組織は、ほとんど知られていなかった。その後、ハクストハウゼンがロシアに土地の共有制を発見し、またマウ

ラーが、土地の共有制こそ、すべてのチュートン種族が歴史の門口にあたってもった社会的基礎であることを立証した。こうして、インドからアイルランドまで、どこでも、村落共同体が社会の原始形態であること、またはあったことが、しだいにわかってきた。この原始共産主義社会の内部組織は、氏族の本性と氏族の部族にたいする関係とについてモーガンがおこなった最後の仕上げとなるべき発見によって、典型的な形態で明らかにされた。この原始の共同体が解体するとともに、社会はべつべつの、そしてついにはたがいに対峙する諸階級に分裂しはじめるのである」〔共産党宣言〕、社会の歴史の注、マルクス・エンゲルス全集』第四卷四七五ページ）

その後、マルクスは原始共同体についての見解を『資本制生産に先行する諸形態』という論文で明らかにしている。¹⁾

(一) この論文は資本制社会成立の前史を研究することにより、資本制社会そのものの本質を明らかにすることを目的にした著作であるが、同時に原始共同体についても説明している。

マルクスは一八五七年から五九年にかけて『経済学批判』（一八五九年刊）および『資本論』（第一卷、一八六八年刊）執筆のための予備作業をおこなったが、その草稿が一八九一四年にソ連のマルクス・エンゲルス・レーニン研究所によって公刊された『経済学批判要綱』*Grundriss der Kritik der Politischen Ökonomie* である。しかし、一八九九年から四一年という戦時でもあり、また場所もモスクワであったため、その出版はほとんど注目されることなく、一九五二年になって、『資本制生産に先行する諸形態』の部分がパンフレットとしてベルリンで出版され、五三年に全巻が同じくベルリンで公刊されるに至って、ようやく学界でも広く知られるようになった。

この『要綱』の第三部「資本の章」の第二節「資本の循環過程」のなかに「経済的社会構成体の前進的諸時代」という項目があり、これが有名な資本制生産に先行する諸態——資本諸関係の形成、すなわち本源的蓄積に先行する過程についてである。

人間存在の、したがって社会存続の基礎は労働・生産である。生産は、労働の主体である人間と、労働に必要な諸条件によ

っておこなわれる。そして土地は、人類の初期には主要な生産条件であった。この土地の所有についてマルクスは本源的所有と二次的所有形態をあげている。本源的所有とはマルクスにあっては、アジア的、古典古代的、ゲルマン的という三つの原始共同体的所有の形態である。そして、所有の二次的形態とは、奴隸制的所有であり、農奴制的所有であり、資本主義的所有である。

『諸形態』におけるマルクス理論で、主要な論点は、(一)本源的所有——所有とは本来なんであるか——、(二)本源的所有の第一形態、(三)本源的所有の第二形態、(四)本源的所有の第三形態、(五)本源的所有の三つの形態の共通点、(六)所有の本源的形態と二次的形態、(七)原始共同社会と資本制社会、などである。

所有とは、もともと、どのような意味をもっていたのか。所有とは労働する主体（人間、またはその集合体）が、自分のものとしての生産の諸条件にたいする関係のことである。原始人が労働に必要な大地にたいする関係がそうである。ここでは人びとは自分たちのものとして、生きるために必要な、労働のなくてはならない条件としての土地と関わりをもっている。マルクスはいう。

「所有とは、本源的には——アジア的、スラヴ的、古代的、ゲルマン的形態では——労働する（生産する）主体（ないしは自己を再生産する主体）が、自分のものとしての彼の生産と再生産の諸条件に対して関係すること」である。

だから所有とは労働において実現される人間と生産条件の関係であり、人間が生産条件を自分のものとする関係である。

そこで当然、労働・生産をおこなわない人間以外の他の動物には所有関係はない。この場合、生産の主体である人間は、群棲動物であり、その当初から孤立して生存することできず、自然発生的な血縁共同体としてのみ存在していた。だから労働も集団的な共同労働であり、協業であった。そして所有も共同体的所有だったのである。個人はこの共同体の一員としての生存できたのであり、共同体の一員としてのみ私的所有者、もしおは占有者であることができたのである。

ところで、先資本体制社会では、土地こそが人間生存のための不可欠の条件であったのだから、所有は必然的に土地所有としてあらわれる。土地の所有関係の差異が、社会形態の差異としてあらわれ、土地がだれに所有されているかによって、その社会での生活における人と人との関係、階級関係が決定されたのである。

しかし、とはいえ所有の最初の対象は土地ではなかった。土地を所有するまえに、地上の動産（家畜、奴隸、道具、その他の生産物）の所有があった。マルクスはいう。

「所有は、たしかに本源的には動産である。なぜなら、人間は始めに、土地の完成果実をわがものとするからである。この動産のなかには、わけても動物とくに人間が馴致しうるものがある。

しかしながら、このような狩猟、漁撈、遊牧、木の実による生活といったような状態にあってさえも、固定した住所のためであろうが、放浪するためであろうが、動物の放牧地などのためであろうが、ともかくつねに大地の領有を想定しているのである」

こうして、人間が、自分のものとしての、彼の生産・再生産の諸条件のなかの、もっとも本源的な生産条件である土地に対する関係こそ、もっとも本源的な所有関係なのである。

これに対して、「二次的所有」とは、労働者自身が自分のものとしての生産条件に関係するのではなく、ある第三者（個人または団体）のためにおこなう生産の、自然的条件の一部分となつている場合であつて、奴隸制や農奴制、さらには資本制などにおける所有がそうである。

以上の共同体的所有の三つの形態に共通な点は、次のとおりである。

(1)どの形態も共同体を基底としている。そして、アジア的、古代的、ゲルマン的という三つの共同体は、本源的所有の主体である。

(2)この三つの形態にあつては、結局は、土地所有と農業とが経済制度の基礎であつた。

(3)交換価値ではなく（つまり売るためではなく）、使用価値（使用すること自体が目的のため）の生産、個人および共同体の再生産が、その経済的目的であつた。

(4)本源的土地所有では、労働の結果ではなく、逆に労働の自然的条件、本源的労働用具であり、仕事場であり、原料の貯蔵場である土地の領有が前提となつている。

(5)この場合、個人は孤立した個人ではない。労働の客観条件に対する個人の関係は、共同体の一員である、ということである。共同体のちがいは、労働の客観的諸条件に對する個人の所有の形態のちがひによつて、第一形態、第二形態、第三形態とわけられる。では、これらの三形態のちがひはどこから生まれたのか。それは、一部は種族の自然的素質のちがひからであり、他の一部はその種族が所有者として土地と關係を結ぶときの経済的条件による。そして、種族の自然的素質とか経済的条件などは、氣候、土地の物理的性状、物理的に条件づけられた土地の利用の仕方、敵対種族または隣接種族との折衝、移動な

どの事情による。これら三つの形態では、生産こそが人間の目的であり、富とか金銭とかは生産の目的ではない。

もともと労働する人間との関係は、自然な結びつきをしており、人間は自然を単純に領有していた。これが歴史の前提なのである。現在のように、資本家と労働者という階級があり、労働する人間と労働に必要な自然的条件が分離しているという事態は歴史の結果なのである。

ところで、奴隷や農奴の場合には、賃労働と資本の場合のように、人間と自然との分離はない。というのは、労働する農奴自身が、領主とか奴隷所有者のためにおこなわれる生産の自然的条件にくみこまれ、その一部分となっているからである。だから、ここでは、労働者のものとしての労働の諸条件に、労働者が関係している（つまり本源的所有）のではない。これを二次的所有という。奴隷は家畜とならんで、農奴は土地の付属物として、いずれも生産条件として、他の自然的条件のなかにくみこれているのである。

以上でみた如く原始共同社会の特質は、第一に「生産手段の共有」であり、第二に「個々人と共同体との分離できない結びつき」、両者の統一、であり、第三に、そこでの生産の目的が個人と共同体が生存してゆくに必要な「使用価値の生産」——売るためを目的とした（交換）価値の生産ではなく——である。

人類はこれまでに五つの社会形態を経験してきた。すなわち、原始共同（産）社会、奴隷制社会、封建社会、資本主義社会、社会主義社会である。

原始共同（産）社会は、同じ血を分けた種族とか部族とか氏族とか呼ばれる集団を構成している人々が、土地および生産手段をすべて共有し、生産し、分配するという階級のない社会である。

原始共産社会は、人間が他の動物と区別されるようになってから階級社会に移行するまでの、恐らくは百万年を超える長い期間にわたっており、それは地域的にも時期的にもいろいろな特徴をもって存在しているとみられている。この原始共産社会は、その最終の段階で剰余生産物の生産という物質的根拠により階級社会へ移行する。だから、原始共産社会の最後の段階は共有社会の最終段階であると同時に私有社会への過渡的段階である。

原始人は共同で得たものをすべて平等に分配して暮らした。

まだ剰余生産物がなく、かつ誰でもみな食糧を得ることのできる条件が備わっていなかった段階では、このように暮らすことが避けられなかった。しかし剰余生産物が生じ、人間の地位を高める可能性が生まれ、またすべての人間が食糧を入手できる条件が準備されるようになると、共同で得た食糧を平均に分けて食べる古い社会的関係は邪魔になり、社会発展の障害物となった。

剰余生産物が生産されるようになると、少しづつ共同体構成員間の個人的な能力の差も目立ち始めてくる。

集団のなかでの特定の個人の働きが他より優れていることが明らかとなり、また個別に生活資料を獲得する条件も生まれてくるにつれ、必要に応じた平均的分配ではなく、能力に応じた分配の要求が生まれてくる。こうなると人々の生産意欲を高めるためには役割に応じた分配を実施する必要がある。役割に応じた分配の実施は、人間の役割を高め、社会全体の利益に合うばかりでなく、特に比較的創造能力が発展していて、より多くの役割を果たすことのできる社会構成員の生産意欲をさらに増大させる。したがって必要に応ずる分配に反対し、役割に応じた分配を実施する社会的改革の先頭に立ったのは、比較的自主性と創造性の強い社会構成員であった。

役割に応じた分配問題は、剰余生産物が生じると同時に発生する。

社会の全構成員に必要生産物以上の剰余を等しく分配できるほどには豊かでなく、したがって一部の構成員の要求をよりよく満足させる程度の剰余生産物しかない場合、それを誰に優先的に分配すべきであろうか。大きな役割を果たす社会構成員に優先的に分配することが至極当然なことであつたらう。共同で獵をする時でも、抜群の役割を果たした人を特別に優待する慣習があつたのである。

原始社会の末期になると、人々に共同して狩りをするよりも、家族のような小規模の集団に分かれて牧畜をしたり、農耕をする方が有利であることに気づくようになり、こうして原始社会の内部で剰余生産物が生産されるようになり、また生活資料を獲得する仕事が増加するにつれて、家族を単位として個々の責任によって労働が行われる場合の役割による分配がより広範に実施されるようになり、分配の差が拡大したばかりでなく、その分配物を個別的に所有することが神聖不可侵の権利として認められるようになった。これは富に対する個人的所有権の発生にほかならない。一方、生産単位が小規模になり、生産物に対する個人の所有が発展するにつれ、役割に応じた分配は生産者の間で競争を奨励することになった。これはつまり経済生活における価値法則の作用にほかならない。こうして貧富の差が拡大し、富者が貧者を経済的に従属にさせ、搾取する現象がひき起こされた。そして、剰余生産物の発展の結果、他人の剰余労働を搾取する可能性が生まれると、それぞれの社会はこの本源的所有を基本とする社会の内部でウクラッドとしての、また生産方法としての奴隸制や農奴制の発生をみるようになる。

原始社会から階級社会へ移行した民族は、まず原始的な搾取被搾取関係として領主と農奴の関係でも、資本家と賃金労働者の関係でもなく、奴隸所有者と奴隸の階級関係をつくり出した。

剰余生産物の生産を物質的基礎として成立するのは直接生産者を搾取するという可能性であり、奴隸の発生である。ただし奴隸の発生と奴隸制社会の成立とは異なる。そして、この奴隸制や農奴制がその社会で支配的關係となつたとき、奴隸制社会や封建社会が成立したといえるのである。

奴隸制社会は、奴隸所有者と奴隸の存在する階級社会であり、人格的な自由をもたず、ただ「話をする動物」としての奴隸が、農業その他の生産に従事し、奴隸所有者である自由人が支配者として奴隸の生産の成果をすべて取り上

げるといふ社会であつた。

では奴隸制社会はどうして崩壊したのか。

奴隸に対する支配階級の搾取と圧迫は奴隸の反乱をひき起こさざるを得なかつた。

奴隸は生産の發展に何らの関心も持たなくなり、他方奴隸主にとっては奴隸を酷使することが牛馬を使うよりも別に大きな利益にならない場合も生じた。当時の有名な哲学者は奴隸を何年で使い殺すのが一番有利かという論文を書いている。まだ戦争で奴隸を大量に獲得出来る条件があつた頃は、奴隸制労働も採算がとれたが、一旦征服戦争が終り、奴隸の給源が枯渇し、奴隸の値段が騰貴してくると奴隸制生産は不利になつた、考えてみるならば人間を動物視して人間を牛馬の如く取り扱う奴隸制生産が、征服戦争のような非正常な事態の下で、一時的に力を發揮することがあつても、人間社会としていつまでも存続するなどということは不可能なことだったのである。したがつて歴史的には、奴隸が社会的生産の基本担当者になつていたいわゆる奴隸制社会は、この地球上でわずか数か国でしか実現しなかつたのであり、その典型がギリシア・ローマの奴隸制社会である。奴隸制社会は政治、経済、文化などの社会的生活のあらゆる分野にわたつて、原始社会とは比較にならないほど大きく發展した。奴隸労働の搾取により奴隸主は、肉體労働から解放され、余暇を持つようになり、文化や社会政治制度を發展させることができた。しかし、生産から完全に遊離した階級として奴隸主たちが發展させた精神文化は、勤労人民大衆の利益には奉仕せず、支配階級のためのものであつた。

奴隸制社会の末期に奴隸にも、完全な人身的な隷属から解放され、自由な小所有者になることの出来る一定の条件が生まれた。

奴隷の境遇は悲惨であったが、骨の折れる労働や奴隷制に反対する闘争の過程で、創造力も発達し、意識水準も次第に高まった。奴隷所有者の生活と奴隷の生活は天地の差があったから、こうした顕著な差は、奴隷の覚醒に大きく作用した。したがって奴隷社会における奴隷の自主的な思想意識と創造的能力は、原始社会の人間とは比較にならないほど高い水準に達した。しかし奴隷は、奴隷制社会の物質的・文化的富を利用して自らを奴隷の境遇から解放し、自由な小所有者の身分に引き上げることの出来るような水準の自主的な思想と政治的能力を持つてはいなかった。奴隷は、奴隷主の過酷な搾取と圧迫から解放されることを望んだが、どういふ社会をどのように建設すべきかについては理解することができず、また支配階級を打ち倒すことのできる政治的軍事的能力を持つてはいなかった。

したがって奴隷暴動は、スパルタクスの反乱のように支配階級に大きな打撃を与え奴隷制を崩壊させた重要な原因にはなつたが勝利をかちとることは出来なかつた。これに対して支配階級は、崩壊に直面した搾取制度を、直面した新しい条件に即応して改編し、その特権的地位をひき続き維持する活路を見出すことが出来る程度 of 思想と政治的能力を所有していた。それゆえ一部の奴隷所有者は、既に奴隷的身分を廃絶する以前から奴隷制生産の不合理を悟り、奴隷に封建的な小作制に似た搾取形態を適用し、ついに奴隷制から農奴制への転化の道を切り開いたのである。

こうして封建社会が生まれた。

封建社会は、土地にしばりつけられ、移住や転職の自由をもたない農民などの零細な生産者が、封建領主とその家臣団によって武力で身分的に支配され、生産者の生産物のなかの生活に必要な部分（必要生産物）以外のすべての生産物（剰余生産物）を経済外的強制によって取り上げられるという社会である。

当初の農奴は身分的に隷属させられており、引き続き搾取されている点では奴隷の延長であったが、若干の労働手

段を所有し、自分が責任をもって手工業的方法で生産するという点では、小所有者と類似している。まさに支配階級は、奴隸によってつくられた手工業的道具に基づいて小所有者の手工業的生産を發展させることが有判であることを看破して、奴隸制を農奴制に切り替え、より安全な状態でひき続き搾取することを可能とする体制をつくり出したのである。

封建社会でも生産力は漸次發展したのであるが、封建的支配者の過酷な搾取と宗教その他の觀念論の影響などもある。農奴と一般小農民の思想水準は極めて立ち遅れていた。封建的農民もまた奴隸と同じくどういふ社会を建設すれば封建的搾取と抑圧からみずから解放できるという理論をもつことはできず、自己を解放するための政治的能力や軍事的能力も所有していなかった。

それゆえ農民暴動もやはり勝利する見込みのない闘争であつたし、既存の支配制度を覆すことができた場合でも、その結果は、彼らを搾取する支配階級の交替で終らざるを得なかつたのである。

封建制度の矛盾が激化した封建末期には、勤労人民が封建支配を打倒してみずからを解放しその地位と役割を高めることの出来る有利な客観的条件が与えられていた。にも拘らず、この有利な条件を利用するための闘争で、主導権を握つたのはブルジョアジー、すなわち新興資本家階級であつた。こうして資本制社会が生まれた。

資本主義社会とは、生産手段を所有していない労働者が自己の労働力を生産手段の所有者である資本家に時間をきめて商品として売り渡し、資本家は労働者に労働力の再生産ができる程度の賃金を支払って働かせ、労働者が賃金以上に働いた部分（剰余価値）剰余価値を利潤として取得する社会である。

当初のプロレタリアート、すなわち賃金労働者階級は、まだ独自の階級としての自己を形成してはならず、農奴と

小農民は封建的身分制から解放されることを望んではいたが、どういふ社会をどのようにな建設すべきかを知らなかった。

当時、最も進歩的な階級であつた都市の手工業者は、反封建民主主義革命を徹底的に遂行することを要求したが、かれらもまた経済搾取制度をそのままにして置いては政治的に完全な民主主義が実現出来ないことを理解できなかった。

元来小所有者は、その階級的制約により、私的所有とそれに基づく資本主義的搾取制度自体に反対する方向には進まず、小所有者の自主性を保障してくれる平等を実現しようとするに止まつた。

しかし、私的所有に基づく商品貨幣経済の発展は、必然的に階級分化を促進し、社会的不平等を拡大する資本主義発展への道を切り開いたのであり、この点で小所有者の民主主義思想は、社会発展の方向と矛盾する幻想であつた。

一方絶対的多数を占める農民は、まず封建的身分制から解放されることにのみ関心を持ち、将来、社会の主人になるということまでは考えなかつたため、資本家階級の反封建民主主義的スローガンに幻惑され、その同盟軍となつた。こうして資本家階級は農民大衆を自分の味方にひきよせて封建制度を打倒し、資本主義制度をうち立てることに成功したのである。

資本家階級は、都市手工業者や農民とは違って、自分たちが主人となる社会がどのような社会であるかを自覚しており、経済的にも政治的にも彼らより優れていた。

奴隸制社会の奴隸や封建社会の農奴は、支配階級の搾取と抑圧を好まず、そのような社会を打倒して、自由な社会をつくり、自由な身分となることを望んだ。彼らは、当時の社会で絶対多数を占め、自然改造の能力だけでなく、支

配階級を敗北させ得る力も所有していた。しかし、彼らは、その思想意識の面で決定的に立ち後れていたため、社会の発展法則や自分たちが自由な身分になるためには、どのような社会を建設すべきかについても知らなかったのみならず、政治的能力と軍事的指揮能力においても劣っていた。このため大衆を動員し、組織し、正しい戦略と戦術のもとで、敵と闘うことができなかつたばかりでなく、奴隷の反乱とか農民暴動として、時には強大な勢力に成長しながら、結局は支配階級によって政治的に利用されたのである。こうして勤労人民大衆は社会発展の客観的・物質的条件である生産力の発展の水準に應じて、人間の地位と役割を高めることができず、依然として反動的搾取階級に支配され続けたのである。たとえば封建社会末期の有利な客観的条件は、結局資本家階級に利用され、資本家階級はこの客観的条件を利用することによって社会の支配的地位を占めるようになったのである。こうして封建的身分制度の廃絶の結果、勤労人民大衆の社会的地位と役割も著しく高まり、社会の発展において莫大な変革が起きたとはいえ、資本主義社会もまた搾取階級の社会であつて、自主的に生き発展しようとする勤労人民大衆の要求とは根本的に相容れない社会にとどまらざるをえなかつたのである。

資本家階級はその経済力を踏み台にして社会の新たな支配階級として登場し、一般的等価物としての貨幣が万能の社会をつくり、人間の労働力までも商品化し、人々の生活を金銭に固く結びつけ、引き続いてその経済的支配権を拡大強化し、それに基づいて社会生活の全般に対する支配権を確立した。しかしそれと同時に資本家階級はその対立者として賃金労働者階級を生み出した。

資本主義社会を変革するためには、そのための主体が必要であるが、それがまさに産業革命を起点として発展した機械制大工業と結びついて出現した賃金労働者階級であつた。自己の労働力以外に何もものも所有しない賃銀労働者

階級は、その組織力と団結力においてそれまでのすべて最も先進的な階級である。

ところで、資本制的生産の行われているところでは必然的にプロレタリアートが存在するが、しかしプロレタリアートの存在ということと、人間解放を自己の使命とする自覚的なプロレタリアートの形成とは同じことではない。

資本家階級は彼らにとって都合のよいプロレタリアートを形成するし、そのための物質的・精神的手段も形成する。だからこそプロレタリアートの歴史的使命をプロレタリアートに自覚させることが必要だったのである。マルクスは次のように述べている。

「今日ブルジョアジーに対立しているすべての階級のうちで、プロレタリアートだけが真に革命的な階級である。その他の階級は、大工業とともに衰え、没落する。プロレタリアートは大工業の最も特有の産物である。

中間身分、すなわち小工業者や、小商人や、手工業者や、農民、この人々がブルジョアジーとたたかうのは、すべて中間身分としての自分の存在を没落から守るためである。したがって、彼らは革命的ではなく、保守的である。それどころか、反動的でさえある。なぜなら、彼らは歴史の車輪を逆に回そうとするのだからである。もし彼らが革命的になることがあるとすれば、それは、彼らがプロレタリアートのなかに落ちこむ時がせまっていることをさとした場合であり、彼らの現在の利益ではなしに、未来の利益を守る場合であり、彼ら自身の立場をすて、プロレタリアートの立場に立たな場合である」〔共産党宣言〕、全集第四卷四八五ページ〕

「ブルジョア階級が生存し、支配するためのもつとも根本的な条件は、私人の手中への富の集積、すなわち資本の形成と増殖である。資本の条件は賃金労働である。賃金労働は、もっぱら労働者相互間の競争のらえにたもたれている。ブルジョアジーをその無意志、無抵抗の担い手とする工業の進歩は、競争による労働者の孤立化のかかわりに、

結社による労働者の革命的団結をもたらす。だから、大工業が発展するにつれて、ブルジョアジーが生産をおこない生産物を取得する基礎そのものが、ブルジョアジーの足もとからとりさられる。ブルジョアジーはなによりもまず自分自身の墓掘人を生産する。ブルジョアジーの没落とプロレタリアートの勝利とは、ともに避けられない」（同上、四八七ページ）

そして支配階級の一部分もプロレタリアートの立場に移行するであろうと、次のように述べている。

「階級闘争が決着に近づく時期になると、支配階級内部の、全体としての旧社会内部の、解体過程は、きわめて激しい、鋭い性格をおびてくるため、支配階級の小部分は、この階級と絶縁して、革命的階級、すなわち未来をその手になう階級に加担するようになる。したがって、以前に貴族の一部がブルジョアジーの側に移行したように、いまやブルジョアジーの一部、とくに歴史的運動全体を理論的に理解するまでに向上してきたブルジョア思想家の一部、プロレタリアートの側に移行する」（同上、四八五ページ）。

これに対してルンペン・プロレタリアートはどうであろうか。マルクスは次のようにみる。

「ルンペン・プロレタリアート、旧社会の最下層のこの受動的な腐敗分子は、ときどきプロレタリア革命によって運動にまきこまれるが、その生活上の地位全体からみて、むしろ喜んで反動的陰謀に買収されるであろう」（同上）
ただ近代資本主義の創出した組織されたプロレタリアートだけが、新社会創造の先駆者としての歴史的使命の担当者である。しかしこの歴史的使命の自覚は自然発生的に賃金労働者のなかから生まれるものではない。

人間解放を自己の使命とし、あらゆる階級を解放しない限り、自分もまた解放されないと、この賃金労働者階級は、そのための新境界観を必要とするが、この課題は労働者階級の卓越した指導者であるマルクスとエンゲルスによ

つて果たされた。マルクスとエンゲルスは人民大衆の進むべき方向を明らかにするための多くの著作を発表したが、とくにマルクスとエンゲルスは『共産党宣言』を発表し、またマルクス『資本論』を長い年月をかけて執筆した。

(二) プロレタリアと共産主義者

共産主義者とプロレタリアはどのような関係にあるのか。共産主義者と他の諸党派の相異点は何であろうか。この問題に対する答えがここに明記されている。

共産主義者はプロレタリア階級とは別の、何らの私的利益も持たない。ただプロレタリアートの解放による全人類の解放のみをその使命とする。

マルクスとエンゲルスは次のように述べている。

「これまでのあらゆる運動は、少数者の運動か、あるいは少数者の利益のための運動であった。プロレタリア運動は、大多数者の利益のための大多数者の自主的な運動である」(『共産党宣言』、全集第四卷四八六ページ)そしてこの自主的運動の前衛が共産主義者である。

「共産主義者が他のプロレタリア諸党と異なるのは、ただ次の一点においてである。共産主義者は、一方では、プロレタリアのさまざまな一国的闘争において、国の別にかかわらないプロレタリアート全体の共通の利益を強調し、主張する。他方では、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争が経過するさまざまな発展段階において、つねに運動全体の利益を代表する。

だから、共産主義者は、実践的には、すべての国の労働者諸党のうちで、もっとも断固たる、たえず推進していく部分である」(同上、四八七〜八ページ)

共産主義者の革命運動は、各国の具体的状況のうえに立って創造的に行なわなければならず、教条的・観念的に行なわれてはならない。

『宣言』は「共産主義者の理論的諸命題は、けっして、あれこれの世界改良家が發明または発見した理念や原理をもとにしてはいない。

それは、現におこなわれている階級闘争の、われわれの目前におこっている歴史的運動の現実の諸関係を一般的に表現したものにすぎない」（同上、四八八ページ）と述べ、もっとも進歩した国々では次にあげる諸方策が、かなり全般的に適用できるであろう、としている。

「一、土地所有を収奪し、地代を国家の経費にあてること。

二、強度の累進税。

三、相続権の廃止。

四、すべての亡命者および反逆者の財産の没収。

五、排他的な独占権をもった、国家資本による単一の国立銀行をつうじて、信用を国家の手に集中すること。

六、全運輸機関を国家の手に集中すること。

七、国有工場と生産用具を増大させること。単一の共同計画によって土地を開墾し改良すること。

八、万人平等の労働義務。産業軍、とくに農耕産業軍の設置。

九、農業経営と工業経営を統合すること。都市と農村の対立をしないで除去するようにつとめること。

一〇、すべての児童にたいする公共の無料教育。今日おこなわれている形態での児童の工場労働の撤廃。教育と物

質的生産との結合、その他、その他」(同上、四九五ページ)

右の方策のなかで経済的にみて最も基本的なことは生産手段の資本からの解放である。

しかし「共産主義の特徴は、所有一般を廃止することではなく、ブルジョアの所有を廃止することである」(同上四八八ページ)

こうして階級と階級対立のうえに立つ旧ブルジョア社会に代わって、各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような一つの協同社会が現われるのである。

愛情が愛情によってのみ応えられ、信頼が信頼によってのみ応えられる社会、それがマルクスの理想とする社会だったのである。

社会主義社会とは、一口でいえば、勤労人民大衆がその社会の政治権力と生産手段の所有者となり、社会の真の主人となった社会である。しかし、それはまだ共産主義社会の第一段階であり、共産主義社会への過渡的な性格をもつ社会である。マルクスもエンゲルスも、この境界に社会主義社会が出現することをみることはできなかったが、彼らの理念は現代にも脈々と生き続けている。

(三) 社会主義的および共産主義的文献

この箇所では科学的な社会主義・共産主義理論の立場から、種々のエセ社会主義・共産主義理論が批判されている。

a 封建的社会主義

フランスやイギリスの封建貴族はブルジョア社会を攻撃するため、社会主義的言辞を用いている。しかしその目的

はブルジョアの搾取を批判しながら、封建的な、自己の過去の利益を取り戻そうとするところにある。

マルクスとエンゲルスは次のように述べている。

「フランスとイギリスの貴族は、その歴史的地位からして、近代ブルジョア社会に反対するパンフレットを書く使命をおびていた。一八三〇年のフランスの七月革命や、イギリスの選挙法改正運動で、彼らはもう一度この憎むべき成り上り者に破れた。真剣な政治闘争をやることは、もはや問題にならなかつた。彼らにまだやれたのは、文筆上の闘争だけであつた。だが、その文筆の分野でも、王政復古時代の古めかしいきまり文句は、もうとおらなくなつていゝた。世人の共鳴を呼ぶために、貴族は、自分の利益などは眼中にないような顔をして、もっぱら搾取される労働者階級のために、ブルジョアジーにたいする公訴状を作成しなければならなかつた。こういうやり方で彼らは、自分たちの新しい支配者をそしめる歌をうたい、いくぶんとも縁起の悪い予言をその耳もとでささやいて、うつぶんを晴らしたのである」（同上、四九六ページ）

b 小ブルジョア社会主義

小ブルジョア層（小市民層）はブルジョアジーとプロレタリアートの中間層であり、この立場から生まれたのが、小ブルジョア社会主義であつた。その有名な論者がマルクスによって批判されたシスモンディである。彼は近代的ブルジョア社会の矛盾を分析したが、その狙いは古いギルド組織やロマンティックな家父長的経済への逆行であつた。マルクスは次のように述べている。

「この社会主義は、近代の生産諸関係の諸矛盾をきわめて鋭く分析した。それは、経済学者たちの偽善的な弁護論の面皮をひきはいだ。機械や分業の破壊的な作用、資本や土地所有の集積、過剰生産、恐慌、小市民や小農民の必然

的な没落、プロレタリアートの貧困、生産の無政府状態、富の分配のはなはだしい不均衡、諸国民のあいだの産業上の絶滅戦争、古くからの風習や、従来の家族関係や、従来の国民性の解消、これらのものを反駁の余地のないまでに論証した。

しかし、その積極的な内容からみれば、この社会主義は、古い生産手段と交通手段を復活し、こうしてまた古い所有諸関係と古い生産を復活しようとするものであるが、でなければ、近代的な生産手段と交通手段を、それらによって爆破された、また爆破されざるをえなかった古い所有諸関係のわくのなかに、もう一度むりやり閉じこめようとするものであるか、そのどちらかである。どちらの場合にも、それは反動的であり、同時にユートピア的である。

工業では同職組合制度、農村では家父長制経営、これがこの社会主義の最後のことばである」(同上、四九八ページ)したがって小ブルジョア社会主義は古いギルド組織とか家父長的経済などへの逆行を志向するものであり、反動的かつ封建的な思想である。

c ドイツ社会主義または真正社会主義

ドイツで封建的絶対主義に対する闘争が開始された頃、フランスの社会主義・共産主義思想が伝えられた。ドイツのインテリはこれらの文献を耽読した。しかし彼らは、彼らの思想にあわせて思弁的にフランスの社会主義・共産主義又思想を解釈し、哲学的な表現で、その実践的・革命的な本質を去勢した。これがドイツ社会主義の反動的な正体である。マルクスは次のように述べている。

「フランスの社会主義的および共産主義的文献は、支配権をにぎるブルジョアジーの圧迫のもとで生まれたものであって、この支配にたいする闘争の文筆上の表現であるか、この文献がドイツに輸入されたのは、ちょうど「ドイツ

の「ブルジョアジーが封建的絶対主義にたいする闘争を始めたばかりのときであった。

ドイツの哲学者や半哲学者や文士連は、この文献をせっせと取り入れたが、ただ、これらの著作がフランスからドイツにはいつてきたときに、それといっしょにフランスの生活関係もはいつてはこなかったことを、忘れてしまった（ドイツの諸関係をまえにして、フランスの文献は、その直接の実践的な意義をまったく失って、純然たる文章作品とみえるようになった。それは、真の社会についての、人間の本質の実現についての、ひまつぶしの思弁とみえざるをえなかった）。こうして、一八世紀のドイツ哲学者にとっては、フランスの第一革命の諸要求は「実践理性」一般の要求という意味しかもたなかったし、フランスの革命的ブルジョアジーの意志表示は、彼らの目には、純粹意志、こうあるべき意志、真に人間的な意志の法則を意味するものと写った」（同一、四九九ページ）

ドイツの自称「真正」哲学者たちは、共産主義の暴力的傾向に反対し、あらゆる階級闘争を超党派的に拒否することによって、プロレタリアートを無気力にし、かくして反動的な立場に立ったのである。

(3) 保守的社会主義またはブルジョア社会主義

現代までも生き続けているのがこの思想である。すなわちブルジョアジーの一部の人たちは、ブルジョア社会をそのまま存続させ、ただそこでおこる弊害を除去しようとした。ブルジョアの博愛主義、慌善事業などを含むいろいろの各種の改良主義がこれである。

マルクスは次のように述べている。

「ブルジョアジーの一部は、ブルジョア社会の永続を確保するために社会の弊害をとりのぞきたいと願っている。これにはいるのは、経済学者、博愛家、人道主義者、労働者階級の状態の改良家、慈善事業家、助物虐待防止協会

員、禁酒協会の発起人、種々さまざまな三文改良家である。そのうえ、このブルジョア社会主義は、まとまった体系にさえ仕上げられている」(同上、五〇二ページ)

これに対し、このブルジョア社会主義のもう一つの顔は、政治的変革を拒否し、ただ経済的要求を獲得するために労働者は闘うべきだというものである。これをマルクスはブルジョア的社會主義の第二の形態であるとして次のように述べている。

「この社會主義の第二の形態、前者ほど体系的ではないが、もっと實際的な形態は、次のように証明することによつて、労働者階級にあらゆる革命運動をきらわせようとした。すなわち、労働者階級の役にたつものは、なんらかの政治上の変革ではなくて、物質的生活諸關係すなわち經濟的諸關係の変更だけだ、ということであつた。だが、この社會主義のいう物質的生活諸關係の変更とは、けつして、革命的な方法によらなければ実行できないブルジョア的生產諸關係の廢止のことではない。そうでなくて、この生產諸關係の基盤のうえでおこなわれる行政改革のことである」(同上)

(3) 批判的・ユートピア的社會主義および共產主義

空想的社會主義者たち、サンシモン、フリーエ、オーウェンたちの思想は、プロレタリアートの成長が不十分であり、階級闘争もしたがつて未發展な時期の所産であつた。

この思想もブルジョア社會主義と同様に階級闘争に反対した。イギリスのオーウェン主義者が、チャーチストに反対したことに、このことは明瞭に示されている。

マルクスは次のように述べている。

「全般的な激動の時代、封建社会の転覆の時期に、直接に自分自身の階級利益をつらぬこうとしたプロレタリアートの初期の企ては、プロレタリアート自身が未発達の状態にあったためと、プロレタリアートの解放の物質的諸条件が欠けていたためとで、失敗するはかはなかった」（同上、五〇三ページ）

「本来の社会主義的および共産主義的体系、すなわちサンシモン、フリーエ、オーエンなどの体系は、まえのほうで述べた、あのプロレタリアートとブルジョアジーのあいだの闘争の初期、その未発達の時期にあらわれる」（同上、五〇三—四ページ）

マルクスは批判的・ユートピア的な社会主義および共産主義のもつ意義は、歴史の発展に反比例するとして、次のように述べている。

「階級闘争が發展して、はっきりした形をとるにつれて、このように空想のうえで階級闘争を超越し、空想のうえで階級闘争を克服することには、どんな実践的な価値も、どんな理論上の正当性もないようになる。だから、これらの体系の創唱者たちが多くの点で革命的であったのに、その弟子たちはいつも変わらず反動的な宗派をつくっている」（同上、五〇五ページ）

四 種々の野党にたいする共産主義者の立場

共産主義者には勤労人民の幸福を求める以外に何らの目的もない。これがマルクスの精神であった。この原則に立って、共産主義者は種々の野党に対応する。イギリスではチャーチストを支持し、フランスでは社会主義民主党と同盟する。ドイツではブルジョアジーが革命的ならこれと手を取りあって反動勢力と闘う。「宣言」は最後に次のようにいう。

「共產主義者は、自分の見解や意図を隠すことをいやしむ。共產主義者は、従来の上べての社会秩序を暴力的に転覆せずには彼らの目的が達成できないことを、公然と声明する。支配階級をして、共產主義革命のまえに戦慄させよ！プロレタリアは、この革命によって失うものは鉄鎖のみである。彼らの獲得するものは全世界である。」

万国のプロレタリア団結せよ！(同上、五〇八ページ)

三 現代における社会主義の発展

世界の現状をみるときかつての植民地や従属国であったアジア、アフリカ、ラテンアメリカの新興発展途上諸国が、まだ多くの困難に直面しているとはいえ、アメリカをはじめとするかつての宗主国から政治的・経済的に独立して、国と民族の自主・独立をかちとりつつあり、第三世界に属し、発展途上国とよばれ、非同盟運動を推進しているこれらの新興諸国は、先進資本主義諸国の国内・国際的矛盾の激化とその威信の低落傾向とは対照的に、世界史を動かす主力として成長し、世界の桧舞台に登場しつつあることは誰の目にも明らかである。

資本主義社会以前の階級社会にあつては、労働人民大衆の社会的地位、その自主性と創造性は現在とはくらべようもなく低いものであつた。

マルクスが活動した資本主義の自由競争段階の時代は、おもに欧米中心に発展した資本主義諸国の労働者階級が、自己の歴史的使命を自覚し始めは時代であつた。当時はまだ社会主義革命は勿論勝利してはならず、どの国においても人民大衆は社会の主人としての地位を占めてはいなかつたし、世界人口の絶対多数を占めるアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の人民は世紀的な眠りからまださめてはいなかつた。

レーニンが活動した帝国主義時代は、一つの国で社会主義革命が勝利し、労働者階級をはじめとする勤労者たちが、その国の主人になった時代ではあったが、世界帝国主義は自己のひとつの戦線を撃破されたにもかかわらず、依然として国際舞台で人民の運命を左右していたし、地球面積の七〇パーセント余を占め、世界人口の三分の二以上が生活しているアジア、アフリカ、ラテンアメリカは、植民地大陸として帝国主義の広大な後方としての地位に甘んじていた時代であった。

しかし現時代は、人民大衆が歴史の主人公としての地位を奪われていたこれまでの時代に用鐘をうちならし、世界のいたるところで労働者階級をはじめとする被抑圧・被搾取人民大衆が、隷属と圧制の鉄鎖を断ち切り、民族解放をめざして自己の運命を自主的・創造的に開拓するたの闘争にたちあがった時代であり、各国人民が自己の道を進むことをおしとどめることのできない時代である。

金日成主席は次のように述べている。

「長い間、帝国主義・植民地主義の圧制のもとで苦しんでいた被搾取、被抑圧人民が自由と民族独立のために勇敢に闘った結果、現在われわれの時代は、帝国主義が西山落日の運命に陥り、抑圧とさげすみをうけてきた人民が歴史の舞台の主人公として登場する、そのような時代にかわりつつあります」〔自主の旗を高くかかげて進む第三世界人民の革命偉業はかならず勝利するであろう〕（一九七四年三月四日）

自主性の時代である現時代の世界的変化の中で、第一に注目される特徴的な傾向は、強力な社会主義陣営が反帝国主義勢力を形成していることである。

社会主義国は第二次世界大戦前まではソ連一国であったが、現在では一〇余ヶ国となり、世界人口の三分の一以

上、陸地面積の四分の一以上、工業生産高の四〇パーセント以上を占めている。社会主義国は、その本質において労働者階級をはじめとする勤労人民大衆が国の主人となった国であり、人民の福祉を目的とし、平和を追求する国である。

金正日書記は次のように指摘している。

「反帝・反米闘争の強化においてなによりも重要なのは、社会主義諸国と共産党労働者党が反帝の立場を堅持し、国際帝国主義との闘争を強力に展開することである」〔マルクス・レーニン主義とチュチュ思想の旗を高く掲げて前進しよう〕
現在、社会主義勢力と国際共産主義運動は、帝国主義をはじめとするすべての反動勢力と対峙しているもつとも強力な勢力であり、帝国主義の侵略と戦争政策を破綻させ、世界各国人民の自主化闘争を推し進める強力な要因である。したがって、社会主義勢力と国際共産主義運動が、その理想を世界的規模で実現するためには、なによりも団結を重んじて、共通の目的である反帝闘争を優先させ、意見の相違がある場合でも敵対的に処理することなく、相互理解と同志的協力の精神にもとづいて解決しなければならない。

現代の世界の基本的特徴の第二は、社会主義諸国とともに、第三世界諸国、非同盟諸国が、次第に反帝自主勢力を形成しつつあることである。

かつて世界史の舞台で何ら役割を果たすことのできなかつた旧植民地・従属国の多くが、現在第三世界、非同盟国の反帝勢力として歴史の舞台に出現した。今日の第三世界諸国は、早い国で五百年以前から、遅い国も百年くらい前に、さまざまな形でヨーロッパを中心とする資本主義諸国によって支配され、収奪されてきた。このためこれらの国々では、国の独立、民族の自主権を確立する闘争が必然的に絶え間なくくりひろげられていた。

やがて第二次大戦を契機として、民族解放闘争の勝利の第一の時期が訪れ、朝鮮民主主義人民共和国、中華人民共和国、ベトナム民主共和国の成立をはじめ、インド、インドネシアなどアジア諸国の独立、および祖国解放戦争に勝利した朝鮮人民の闘争が展開されたのである。

ついで一九六〇年頃までのキューバ、アルジェリアなどの第二期民族解放闘争がつづき、そして「アフリカの年」と言われる一九六〇年以降今日までの第三の民族解争期に入り、アフリカ大陸全土に独立解放闘争の火の手が燃え上がった。

こうして、第二次世界大戦後、帝国主義植民地体制から離脱した数多くの新興独立国家が出現した。第二次大戦後の一九四六年に七一だった独立国は、一九八一年には一六七ヶ国となり、また、一九四五年に五一だった国連加盟国は、一九八一年には一五七ヶ国に増加した。

非同盟諸国会議が発足した一九六一年には正式加盟国は二五（オブザーバー、三）であったが、年々増加して一九八二年二月には正式加盟国は九七（オブザーバー、九）にまで増加した。また、現在「アフリカ統一機構」に加盟している国は、一九八〇年三月のジンバブエ独立をもって五八ヶ国となり、白人支配の国はナミビアと南アフリカ共和国のわずか二国のみである。

まさに第三世界、非同盟諸国の抬頭は、自主性を求めて帝国主義に反対する一大勢力の前進である。

非同盟運動の開始は、一九五五年にインドネシアのバンドンで開かれた第一回アジア・アフリカ会議であった。非同盟運動参加国の条件は、(1)社会体制の異なる諸国との共存と非同盟政策を支持・実行してきた国、(2)一貫して民族独立運動を支持してきた国、(3)大国の紛争と関係のある多角的軍事同盟に加入していない国、(4)双務的軍事同盟を結

んでいない国、(5)大国の紛争に関連する外国の軍事基地を提供していない国、などであった。

このように非同盟運動は、あらゆる支配と隷属、戦争勢力に反対し、自主性を求める反帝自主勢力である。それ故に非同盟諸国は一致団結して、この運動を推進してこそ、帝国主義の侵略と干渉策動を排撃できるし、国際舞台で生じるあらゆる問題を、すべての民族の自主的志向と利益に沿って解決することができる。

いまや世界に存在する六〇余の国家のうち約一二〇余ヶ国が第三世界に属しており、これら地球の陸地面積と人口の大部分を占め、無尽蔵の資源に恵みである第三世界の諸国が国際舞台でその力を発揮し始めたのである。

主席は次のように述べている。

「第三世界は現時代の威力ある反帝革命勢力です。今日、第三世界の人民は帝国主義に反対して勇敢に闘っており、国際舞台で重要な役割を果たしています」〔ペルー・朝鮮友好文化協会書記長の提起した質問にたいする回答〕一九七四年六月二日

帝国主義が存在する限り、この地球上から支配と略奪を一掃することはできず、また同時に、支配と略奪が存在する限り、人民大衆はそれに反対する闘争をせずには、その自主性を確立することができない。それ故、反帝自主化闘争は、人民大衆の運命と、彼らの自主的で創造的な生活を切り開くための死活的な闘争である。今では、それぞれの資本主義国内部の労働者階級を先頭とする勤労人民大衆の自覚は高まっており、組織力も強化され、帝国主義国内部でも、自国の帝国主義政策に反対し、自主性と平和を求める広範な人民大衆の運動がめざましく発展しつつある。

さて以上の概観からもわかるように、現在、世界には相対する二大勢力が存在している。すなわち、一方は全世界の人民大衆の抑圧者であり、平和の敵であるアメリカを題目とする帝国主義勢力であり、他方は人類の解放を求める

社会主義諸国と、自主・独立を志向するアジア、アフリカ、ラテンアメリカその他の百数十ヶ国におよぶ第三世界諸国、非同盟諸国からなる反帝自主勢力であり、反帝平和擁護勢力である。そしてこの反帝自主勢力こそが現代の世界史の流れを主導している力である。

金日成主席は、一九八二年四月十五日の生誕七〇周年祝賀宴での演説で次のように述べている。

「現時代は自主性の時代であります。日がたつにつれて世界のより多くの国が自主の道を歩んでおり、自主性を志向する力強い潮流が世界のすべての大陸を覆っています。

われわれは自主性を志向する時代の力強い潮流にそって、全世界の自主化を実現する闘争を力強くくりひろげねばなりません。

全世界を自主化するのは自主性を擁護するすべての国の人民の一致した要求であり、地球上から帝国主義と植民地主義を清算し、すべての国、すべての民族の完全な自主権を実現するための人類共同の聖なる偉業です。

全世界の自主化を実現してこそ、新たな世界戦争の危険を完全になくし、世界の恒久平和を保障し、すべての国で人民の念願と理想にそって、独立し、繁栄する新しい社会を成功裏に建設することができます。

全世界の自主化偉業を成功裏に実現するためには、自主性を擁護するすべての国の人民が共同で努力しなければならず、互いにかたく団結し、緊密に協力せねばなりません。

人民の威力はほかでもない団結の威力であります。一国であれ、全世界的範囲であれ、団結した人民の力は必勝不敗です。

非同盟諸国とすべての新興勢力諸国の人民が自主性を堅持し、かたく団結して共同闘争を力強くくりひろげるなら

ば、帝国主義勢力を孤立弱体化させ、帝国主義の侵略と干渉策動を成功裏に撃退し、国と民族の自主権を守り、全世界の自主化を実現することができます。

朝鮮労働党と共和国政府は今までと同様、これからも自主、親善、平和の旗じるしを高くかかげ、自主性を擁護する全世界のすべての人民との親善協力関係を積極的に発展させ、世界の自主勢力の統一と団結をさらに強化するためすべての努力をかたむけるでしょう。

自主性を擁護する世界人民の共同の努力と積極的な闘争によって、全世界的な範囲で自主勢力の統一と団結は日まに強化され、全世界の自主化の偉業はかならずや輝かしく実現されるであります」

そしてこのような全世界人民の自主化路線を明白に打ち出し、このことに理論的裏付けを与え、世界の反帝自主勢力の統一と団結において指導的役割を果たし、これらの反帝自主勢力の先頭に立って闘い、これら諸国の信望を担い、全世界の勤労人民大衆の解放のための輝かしい導きの星として注目されているのが、マルクス・レーニン主義者として革命の途を歩んだ金日成主席であり、主席の創始したマルクス・レーニン主義的チュチェ思想である。

全世界的範囲での自主勢力の統一と団結、全世界の自主化を説く主席の世界戦略の提示は、主席の五十余年にわたる革命活動経験の尊い結実であり、「一国であれ、全世界的範囲であれ、団結した人民の力は必勝不敗」である。

「万国のプロレタリア団結せよ！」との宣言の精神は現時代にも全世界の自主化として生き続けている。